Publisher's Review
パブリッシャーズ・レビュー
●東京大学出版会・白水社・みすず書房のPR紙●

msz
みすず書房の本棚
［無料送付］
No. 21　2016 冬　（表示価格は税別です）
113-0033 東京都文京区本郷5-32-21　tel. 03-3814-0131　http://www.msz.co.jp

複雑な大戦前史を解きほぐす

――クラーク『夢遊病者たち』巻末「訳者あとがき」より

小原 淳

『夢遊病者たち *The Sleepwalkers*』の原著は刊行間もなく英語圏の歴史学界や読書界で大きな議論を呼び起こし、既にドイツ語、フランス語、イタリア語、スペイン語版が出版されているが、二〇一三年に出されたドイツ語版も半年ほどで約二〇万部の売れ行きを示して話題となった。また、ピーター・カンディル賞優秀賞、ロサンゼルス・タイムズ書籍賞、イギリス・ペンクラブの主催するヘッセル・ティットマン賞（以上は二〇一三年）、アメリカ・ノートルダム大学ヨーロッパ研究所の主催するローラ・シャノン賞（二〇一五年）を受賞するなど、国際的に大きな注目と評価を得ている書である。

著者のクラークは西洋近現代史、とくにドイツ史を専門とする歴史家である。氏は一九六〇年にオーストラリアに生まれ、現在はケンブリッジ大学教授としてヨーロッパ近現代史を担当している。こんにちの歴史学界をリードする研究者の一人である。

クラークの研究には、近現代ドイツ史をプロイセンを中心として精緻に論じる一面と、数百年に及ぶ歴史をヨーロッパ規模で大局的に語る一面の双方があり、また緻密な史料の考証に立脚した分析と、明快な筆致で広い読者層に訴えかける叙述の二面もあるが、これらの相反する両面が分かちがたく結びついている点こそがその真骨頂であろう。

第一次世界大戦に関する研究には既に膨大な蓄積があり、とりわけ百周年にあたるこの数年は大いにその厚みを増している。そうしたなか、研究の領域は、外交関係から各国の国内政策、個々の戦闘の具体的な状況、軍事技術の発展、文化・思想上の変化、個人的体験、銃後の社会の日常生活、総力戦体制の形成過程、ジェンダー論、植民地支配への影響、非ヨーロッパ諸国の戦争への関与、暴力とジェノサイドなど多岐にまたがり、さらにこれらの諸テーマを組み合わせた議論も活況を呈しているが、一九世紀末から戦争勃発の一九一四年七月までを対象に、ヨーロッパ諸国が第一次世界大戦に突入していった原因を外交史の次元で考察する本書は、古典的なスタイルの著作であると同時に、枝分かれが進む第一次大戦研究の全般に関わる射程の広さをもっている。

本書の特色としては、以下の点を挙げることができる。第一に、「なぜ Why」よりも「いかに how」という問いかけを重視し、「帝国主義」や「ナショナリズム」等々の概念や理論を多用した説明によってではなく、細かな史実の積み重ねによって複雑な大戦前史を論じるという手法を貫いている。著者は大部にわたる刊行史料はもとより、イギリス、オランダ、ベルギー、フランス、ドイツ、オーストリア、セルビア、ロシアの多数の文書館史料を渉猟しており、そのことは重厚な実証研究としての価値を高めている。

第二に、公正な立場から、ドイツの戦争責任を強調する多くの先行研究の見解を再検討している。周知のように、第一次世界大戦終結後の戦争責任の追及は極めて苛烈であったし、その後の第二次世界大戦の戦争責任問題とも相まって、ドイツの責任をいささかなりとも軽減しようとする言辞に対する国際社会の目はなお厳しい。なお、ドイツがヴェルサイユ条約の定めた賠償金を一応完済したのは二〇一〇年一〇月三日のことで、この問題はヨーロッパにおいてはアクチュアルであり続けている。そういった状況のなかで、クラークが第一次世界大戦の責任の所在をドイツのみならず英仏墺露、そしてセルビアといった戦争に関与したあらゆる国の政治指導者、さらには彼らの政策決定に一定の影響を及ぼした国民の世論にまで広げて考察したことは、今後の議論を大いに喚起する契機となろう。ただし、本書を正確に読めば、クラークが単純なドイツ免罪論を説いたり、戦争責任論を戦勝国の一方的な押しつけと見なすような主張をしているわけではないのは明白である。

第三に、外交史的アプローチをとる従来の研究が、各国の指導者たちの外交政策に大戦勃発の理由を求め、ともすればそれぞれの国家の内部での政策決定過程の複雑さに議論が及ばないきらいがあるのに対して、クラークは、君主、大臣、議会、軍部など、各国内部でそれぞれ自己主張する政策決定者間の複雑な関係や、国内世論や民間団体の影響にも目を配り、国内情勢と外交関係が相互に影響し合うなかで諸国が大戦への道に向かっていく模様を克明に描いている。また、英仏独墺露という大国の活動ばかりに戦争への道が敷かれる要因を求めるのではなく、イタリアやベルギー、そして戦争の着火点となったバルカン諸国、わけてもセルビアの主体性を重視しており、同国の首相であったパシッチをはじめとする小国の指導者たちについても、興味深い叙述がなされている。

第四に、クラークは、諸々の出来事は起こるべくして起こったのだといった、第一次世界大戦から百年後を生きる人間の立場からの決定論的な物言いを慎重に回避し、随所で、歴史のもう一つの可能性について思考を巡らせている。無論、著者のこうした思考は単なる与太話の類ではなく、限定された、あるいは多分にバイアスのかかった史料から得られる歴史理解の限界を認識し、そこから後世の人間は何を学びとれるのかという問題意識から生じたものと理解すべきであろう。こうしたスタンスによって著者は、時代の大勢や社会の構造に強く規定されつつも、独自の思想や感情をもち、独自の営みによって歴史の大河の一滴としてのそれぞれの役割を担う諸個人の個性をうまくすくい上げている。

さらに、明快でバランスのよい叙述も本書の優れた点である。膨大な史資料の分析に基づく専門的な歴史研究の書としても高い水準を示しているが、文章表現は簡潔でありながら要点をおさえ、また随所に興味深いエピソードや人間活劇、登場人物たちの個性の微細な特徴までが描かれ、幅広い層の読者にアピールするものとなっている。

本書には刊行以来、多くの批判も寄せられている。とりわけ厳しい批判が巻き起こっているのはドイツである。本書をめぐって賛否両面から多くの意見が出ることは、研究のさらなる進展につながろう。

（おばら・じゅん　西洋史）

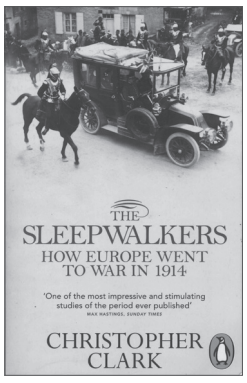
第一次世界大戦はどのように始まったのか。バルカン半島の紛争が、未曾有の世界大戦へと進んでいく過程をまざまざと描き、欧米でベストセラーになったのが『夢遊病者たち』だ。皇帝、政治家、外交官、軍人などヨーロッパ各国の指導者たちは、誰も自らの行為がこれほどの戦争へと展開するのかを予想だにしなかった「夢遊病者」であった。

――第一次世界大戦の起源に関する、バーバラ・タックマンの『八月の銃声』以来の最良の好著。違うのは、『夢遊病者たち』の方は最高の碩学の労作であること。

（ニーアル・ファーガソン）

第一次世界大戦研究の決定版

クリストファー・クラーク
≪夢遊病者たち　第一次世界大戦はいかにして始まったか［全２巻］≫
小原 淳 訳



――間違いなくこのテーマに関する決定版…微に入り細を穿った検証と、流麗な文章が結びついた稀有の書。圧倒的な質の高さに驚嘆と畏敬の念を禁じ得ない…学究の徒は銘記すべし、一級の史書（ヒストリー）は一級の物語（ストーリー）足り得る、と。（ワシントン・ポスト）

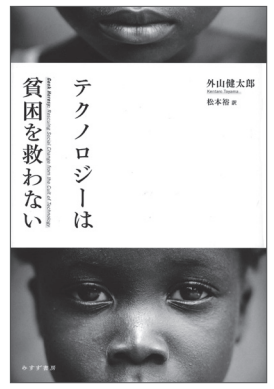
第一次世界大戦勃発の過程をこれほど克明に描いたものはないということで大きな注目を浴びた本だが、開戦責任はドイツにあるという従来の定説を覆したことで、激しい論争を巻き起こした。論争はいまも続いており、歴史学の新たな扉を開いた。二〇一二年に刊行された原著は、ギリシャ危機、イギリスのEU離脱など、ヨーロッパの体制が揺らぐときに、つねに参照されている。現在の紛争の火種がすべてここにあることを示す決定版。

［現代史・世界史］【一月下旬刊】
（四六判①440頁・予価四六〇〇円
②576頁・予価五二〇〇円）

＊ご送付先の変更は、お名前・新住所・郵便番号・旧住所・帯封コードをお知らせ下さい

さよなら技術信仰

外山健太郎
《テクノロジーは貧困を救わない》
松本 裕訳



ビル・ゲイツが賛辞を贈る、人間そのものの力に焦点を当てた、新たな開発論。「外山の研究は万能な解決策などないことを思い知らせてくれる。最貧困層の生活を向上させるテクノロジーは、人間の行動特性と文化的相違への深い理解に基づいたものでなくてはならないのだ」（ゲイツ）。

マイクロソフトのインド研究所での実践が生んだ、貧困問題を解決する処方箋は、《人そのもののアップグレード》だった。その実践はこうして始まった。…ITスキルに大きな格差があるインド。学校では上位カーストの生徒がマウスとキーボードを占領している。「これこそまさに、イノベーションにうってつけのチャンスだ。1台のパソコンに複数のマウスをつないだらどうだろう？…そしてすぐに〈マルチポイント〉と名付けた試作品と、専用の教育ソフトまで作ってしまった」。しかし「ただでさえ生徒を勉強に集中させるのに苦労していた教師たちにとって、パソコンは支援どころか邪魔物以外のなんでもなかった。…テクノロジーは、すぐれた教師や優秀な学長の不在を補うことはできなかったのだ」。

人に焦点を当てた、ガーナのリベラルアーツ教育機関「アシェシ大学」、インド農民に動画教育をおこなう「デジタル・グリーン」、低カーストの人々のための全寮制学校「シャンティ・バヴァン」などを紹介しながら、社会を前進させるのは、テクノロジーではなく、人間の知恵であることを語りつくす。

［国際開発・貧困削減］
（四六判・400頁・三五〇〇円）

ドイツ戦後処理の再検証

武井彩佳
《〈和解〉のリアルポリティクス　ドイツ人とユダヤ人》

ヒトラー政権下、六〇〇万ものユダヤ人を虐殺したドイツ。迫害されたユダヤ人の安住の地として戦後建国されたイスラエル。両者の間に横たわる死屍累々を思えば、関係修復など不可能に見えたが、現在、ドイツ人とユダヤ人の関係は良好であり、国レベルの関係はさらに良い。戦後処理のモデルと言ってよいだろう。

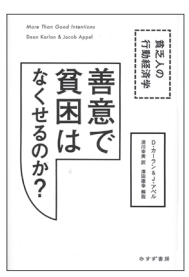
ヤドヴァシェム（イスラエルにあるホロコースト記念館）
犠牲者の写真と名前が並ぶ

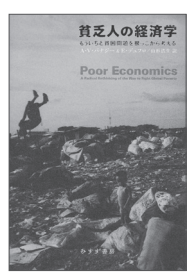
一方で、同様の歴史問題を近隣国との間に抱え続ける日本には、ドイツの成功を歓迎しない空気がある。ドイツとは戦後の政治環境が違う、ナチの残虐さや強制売春の存在があったではないか、と。無条件な称賛は問題であるが、それでは我々は、ドイツの例をどう捉えるべきなのか。

本書は三部から構成される。第一部では、ドイツとイスラエルの関係史を犠牲者への補償と新生国家への軍事支援から検討する。第二部では、歴史的に大きな不正を被ったマイノリティ社会の再生と社会的統合のために国家がとった政策が、そして第三部では、ホロコーストをめぐる記憶の政治が検証される。

謝罪、補償、国益をめぐる駆け引き。偽証や歴史修正主義の受け止め方。ヘイトクライム、ヘイトスピーチへの態度。ドイツ・ユダヤ関係の核心を本書は「リアルポリティクス」と位置づけ、それは、負の歴史に向き合うことを「自虐」と呼ぶ態度の対極にあると説く。後世の歴史認識に輪郭を与えるのは現在の我々である。そのことを知らしめる、一書。［歴史認識・戦後補償］【一月中旬刊】

（四六判288頁・予三四〇〇円）





■関連書より ▽**V・E・フランクル『夜と霧』**［新版］池田香代子訳（一五〇〇円）▽**J・フリードリヒ『ドイツを焼いた戦略爆撃 1940−1945』**香月恵里訳（六六〇〇円）▽**R・ジェラテリー『ヒトラーを支持したドイツ国民』**根岸隆夫訳（五二〇〇円）

■関連書のご案内

近年、国際開発の現場では、新たな実践の大きな潮流が生まれています。その中のひとつが、『テクノロジーは貧困を救わない』でも紹介されているRCT（ランダム化対照試験）です。貧困削減を目的とする政策の効果を、政策を実施した群と、実施しない群を比較して、客観的、科学的に計量する手法です。

この動きを先導しているのが**『貧乏人の経済学』『善意で貧困はなくせるのか？』**の著者たちです。

▽**バナジー／デュフロ『貧乏人の経済学――もういちど貧困問題を根っこから考える』**山形浩生訳（三〇〇〇円）▽**カーラン／アペル『善意で貧困はなくせるのか？――貧乏人の行動経済学』**清川幸美訳 澤田康幸解説（三〇〇〇円）

音楽と政治の起源に耳を傾ける

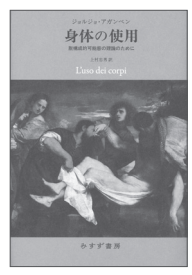
ジョルジョ・アガンベン
上村忠男訳
《哲学とはなにか》

「ギリシア人は、今日のわれわれが知らないふりをしていること、すなわち、言語活動ではなく、なにより音楽をつうじて社会を操縦し統制できることを完全に知っていた。」

つぶやき、うめき、赤ん坊の訴え。言葉になる以前の場所に、音楽と政治の起源があるという。それらに耳を傾けず、「要請（求め）」に応答せず、必然しかないのであれば、哲学は存在しないだろう。

アガンベンは「哲学とはなにか」という問いには直接に答えるのではなく、「音声」「言い表しうるもの」「要請」「序文」「ミューズ（詩女神）たち」がエンブレムをなしている五篇のエッセイをつうじて答えている。そこでは彼の方法の特徴にしたがい、考古学的研究と理論的研究が密接にからまりあう。

そしてウィトゲンシュタインの言葉《哲学するということはもともと詩作することでしかありえない》に共振して閉じられる。哲学はつねに詩の／詩という哲学なのであり、詩はつねにもともと哲学の詩なのである、と。



アガンベンの思想の根幹を鮮やかに示す書。

［思想］【一月下旬刊】

（四六判224頁・予四〇〇〇円）

■著者既刊 ▽**『身体の使用――脱構成的可能態の理論のために』**上村忠男訳（本面下広告）▽**『いと高き貧しさ――修道院規則と生の形式』**上村・太田訳（四八〇〇円）▽**『イタリア的カテゴリー――詩学序説』**岡田温司監訳（四〇〇〇円）

コンペを克明に分析
日本近代建築史の決定版資料

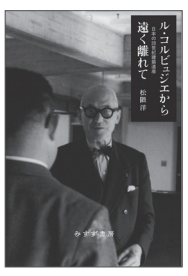
松隈 洋
《建築の前夜　前川國男論》

1930年、帰国直後

ル・コルビュジエのもとで学び、帰国後レーモンド事務所を経て独立した建築家・前川國男の敗戦までの軌跡。「日本趣味」という募集規定にあえて逆らった案により一躍モダニズム運動の旗手として脚光を浴びた東京帝室博物館コンペ、代々木か明治神宮外苑か駒沢か――IOC総会で開催決定後も主競技場の敷地が二転三転するなか岸田日出刀のもとで練りあげた「第十二回オリンピック東京大会」会場計画、当初の前川案から紆余曲折を経て坂倉準三に委ねられ、建築部門グランプリを受賞したパリ万博日本館、前川が審査員に加わり丹下健三が一等当選を果たした日米開戦後の大東亜建設記念営造計画、そして戦時下最後のコンペとなった在盤谷日本文化会館ほか日本近代建築史上重要な設計競技やプロジェクトの実相を水面下の動きとともに浮かびあがらせ、戦時下の体制への建築家の関与や抵抗をも検証した決定版資料である。図版多数収録。［建築史］

（A5判・496頁・五四〇〇円）

■著者既刊 **『ル・コルビュジエから遠く離れて――日本の20世紀建築遺産』**には、一九五五年、国立西洋美術館設計のために来日したル・コルビュジエの足跡を追ったドキュメントも収録。（六面下広告）



みすず書房新刊

（2016・1〜11）1

東京・文京・本郷5
TEL03-3814-0131
（価格は税別です）

［1月］
ルシアン・フロイドとの朝食　描かれた人生
グレッグ フロイトの孫にして現代絵画界のスターとなった画家の謎めいた人生を追う初の伝記。**小山太一・宮本朋子訳　五五〇〇円**

移ろう中東、変わる日本　2012−2015
酒井啓子 アラブの春からイスラーム国への転落。排外主義のはびこる日本。中東研究第一人者が情勢を鋭くえぐる時評。**三四〇〇円**

身体の使用　脱構成的可能態の理論のために
アガンベン 哲学史二千年の後、新しい生・政治・倫理を開く観想とは。「ホモ・サケル」シリーズの最終巻。**上村忠男訳　五八〇〇円**

代表的アメリカ人
ウィリアムズ 新大陸の発見から南北戦争まで、新世界四〇〇年の歴史を形作ったアメリカ人の群像を描く。**富山英俊訳　三八〇〇円**

［2月］
文楽の日本　人形の身体と叫び
ビゼ 自ら義太夫を習うフランス人哲学者による、目からうろこの創見とエスプリに満ちた身体芸術文化論。**秋山伸子訳　四二〇〇円**

私は一本の木
宮崎かづゑ ハンセン病療養所・長島愛生園で七十八年を生き、米寿を迎えた人が刻む、きらめく人生の足跡。好評重版。**二四〇〇円**

正義の境界
オニール〈グローバル正義〉から排除されるのは誰か。正義の哲学的な境界と、政治的な境界を考察する。**神島裕子訳　五二〇〇円**

想像力の時制　文化研究II［全2巻完結］
ウィリアムズ 表題作ほか本邦初訳15篇、新訳1篇。ジャンルの垣根をこえ展開する「文化唯物論」の地平。**川端康雄編訳　六五〇〇円**

時間かせぎの資本主義　いつまで危機を先送りできるか
シュトレーク 貨幣による時間かせぎはいつまで可能か。70年代から現在まで、資本主義の危機を解明。［5刷］**鈴木直訳　四二〇〇円**

指紋と近代　移動する身体の管理と統治の技法
高野麻子 なぜ指先の紋様なのか。近代的統治の課題とは？ イギリス帝国から日本帝国、今日に至る生体認証技術の変遷。**三七〇〇円**

手話を生きる　少数言語が多数派日本語と出会うところで
斉藤道雄 手話があるから、そのままの自分で生きられる。豊かな文化を脈々と紡いできた日本手話とろうの世界。［重版］**二六〇〇円**

［3月］
大山猫の物語
レヴィ＝ストロース その神話研究とは何だったのか。半世紀に及ぶライフワークの終着点と晩年の思索。**渡辺公三監訳　五四〇〇円**

もっとも崇高なヒステリー者　ラカンと読むヘーゲル
ジジェク 精神分析と哲学を架橋し、現代を読む道を拓く。ジジェクの思索のすべてが凝縮された書。**鈴木・古橋・菅原訳　六四〇〇円**

ベイリィさんのみゆき画廊　銀座をみつめた50年
牛尾京美 創業五十年の名画廊の先代オーナー加賀谷澄江の生涯をたどり、凛とした生き方を再発見する爽やかな記念誌。**三四〇〇円**

［4月］
亡き人へのレクイエム
池内紀 彼方にいってしまったけれどずっと大切な人。米原万里、児玉清、野呂邦暢など28人の「ペンによる肖像画」。［重版］**三〇〇〇円**

拝啓　市長さま、こんな図書館をつくりましょう
アンニョリ SNSの時代に人はもっと図書館を必要とするだろう。居場所としての新しい図書館像を提示。**菅野有美訳　二八〇〇円**

京城のモダンガール　消費・労働・女性から見た植民地近代
徐智瑛（ソジヒョン） 植民都市ソウルを闊歩、日本の紡績工場や炭鉱町にも流れでた女たち。忘れられた声が明かす近代史。**姜・高橋訳　四六〇〇円**

李禹煥　他者との出会い　作品に見る対峙と共存
V・B＝ヴァルラーベ 生成と消滅、充満と空虚、明と滅――李の芸術を解き明かすエレガントな本格的作家論。**水沢勉訳　六三〇〇円**

小尾俊人の戦後　みすず書房出発の頃
宮田昇 敗戦後の廃墟で出版社を立ち上げた小尾俊人。『夜と霧』刊行までの試行錯誤、奮闘とその人物像。創立70年記念。**三六〇〇円**

［5月］
昆虫の哲学
ドルーアン 人間の昆虫観を西洋哲学にたどる科学エッセー。円城塔、荒俣宏、養老孟司らに好評を得て重版。**辻由美訳　三六〇〇円**

出会いを求めて　現代美術の始源［新版］
李禹煥 「もの派」の理論的支柱による評論集。表現をめぐる思索を喚起する60年代末―70年代の思索の跡。待望の復刻。**四〇〇〇円**

料理と帝国　食文化の世界史　紀元前2万年から現代まで
ローダン 大国の興亡と古今東西のあらゆる食文化の変遷を辿った包括的な歴史。壮大な研究の集大成。**ラッセル秀子訳　六八〇〇円**

アメリカは、「北京はこう考える」と見ている。

アンドリュー・J.ネイサン／アンドリュー・スコベル

《中国安全保障全史　万里の長城と無人の要塞》

河野純治訳

「本書の目的は、何が中国の政策を動かしているのかを理解すること――できるだけ北京の政策立案者と同じように世界を分析することにある」（序より）

アメリカの中国論の権威が、第二次大戦後から現在まで、政治、経済、軍事の視点から、グローバルに、中国の安保政策を鳥瞰した基本書。直近の脅威論を超克し、超長期的な見方を獲得するために必須の書である。

「脅威に対する脆弱性。それが中国外交の主たる原動力である。北京から見た世界は、政策立案者の部屋の窓の外の通りから、陸の国境や海上交通路まで広がる東西南北数千キロの地域、さらには遠く離れた大陸の鉱山や油田まで、すべてが危険に満ちた場所である」（第1章）

「全般的に見て、中国に隣接する地域は、一つの大国にとって、世界で最も厄介な地政学的環境だと言えるだろう。…またアメリカとは異なり、中国は近隣22カ国のどの国とも純粋な2国間関係を自由に結ぶことがまず許されない。このようなつながりがあるため、中国は一つの国だけを想定して政策を立案することがまずできない」（第1章）

「中国にとっても、アメリカとその同盟国にとっても、より望ましい代替案は、中国の安全保障を高めるために、新たな力の均衡を創り出し、現在の世界体制を維持することだ。その場合、中国はより大きな役割を担うことになる」（結論）

「われわれの分析は、中国の目標達成を支援したい人々、阻止したい人々、ただその目標を理解しようとする人々にとって、等しく有用となるはずである」（序）

『フォーリン・アフェアーズ』誌が「広く深い最良の入門書」と評した決定版。［国際関係・外交・現代史］【十二月下旬刊】（A5判・400頁・四六〇〇円）

中世最大最長の商人・都市共同体

フィリップ・ドランジェ　高橋理監訳　奥村・小澤・小野寺・柏倉・高橋・谷澤訳

《ハンザ　12―17世紀》

バルト海からイングランドにおよぶ中世北ヨーロッパ交易を支配した、最大にして最長の商人・都市共同体、ハンザ。12世紀から17世紀におよぶ、その制度、文化、歴史を余すところなく詳述した決定版。

「ドイツ・ハンザは、もともとは北ドイツの商人集団であったものが一四世紀半ばに都市の連合体へと変貌した、すぐれて中世的な所産である。確かに、都市同盟そのものは、同時代のドイツやイタリアにも存在している。しかしそのどれ一つとして、ハンザほど長続きもしなければ広がりを持つこともなかった。一五〇〇キロメートルを超える海港都市と内陸都市を結びつけた最盛期のハンザは、ゾイデル海からフィンランド湾、そしてバルト海からテューリンゲンまでの一五〇〇キロメートルもの範囲を包摂していた。…ハンザは、当時の法曹家が当惑するような奇妙な勢力でもあった。ハンザは主権国家ではなかった。というのもハンザ都市は神聖ローマ帝国の領域内に存在し、程度の差はあれ、いずれも多様な聖俗領主の支配下にあったからである。緩やかな組織であるハンザは、法人格を持たず、恒常的な財政や陸海軍も有していなかった。印章もなければ固有の官僚組織や統治機構も持たなかった。唯一の例外的な組織であるハンザ総会Hansetagすらも開催頻度は低く不定期であり、さらに真の意味で全メンバーが出席する総会であったことなど一度もなかったのである」（序論）。

ハンザ商人はどのような船を操ったのか？　ハンザ商人はどのような一生を送ったのか？　はたまた、ハンザはどのような造形美術や都市景観を生み出したのか？　日本のハンザ史の第一人者たちが贈る必携書。巻末には最近の研究史を通観する解説を附す。

［ヨーロッパ史・中世史］【十二月下旬刊】（A5判・488頁・五五〇〇円）

■既刊より　三つの文明が交差し展開する数千年を、現在と過去の自在な往還により語る。**ブローデル編『地中海世界』**神沢栄三訳（四二〇〇円）

書評コラム 1

内澤旬子　メイ・サートン《70歳の日記》幾島幸子訳　を読む

アメリカの詩人・小説家・エッセイストのメイ・サートンは、日記の名手でもある。一九九一年に『独り居の日記』が邦訳刊行されて以来、日本でも多くの、おそらくは主に女性たちの心を摑んできた。四季折々、沢山の花に囲まれた庭と、古い趣ある一軒家の暮らしという、端正な日常生活の描写も良いのだが、それだけではない。独りでいる時間をなによりも大切に護りたいという偏屈で我儘な部分や、同性愛者として相手の女性への想いなども率直に吐露し、内省を深めてゆく文章が、素晴らしい。読み手はまるで鏡をのぞき込むように、いつのまにか自分自身の深い部分へと目を向けさせられていく。

不遇と内なる偏屈に悩んでいた二十代に、筆者も彼女の日記と出会い、大いに励まされ、慰められ、抱きしめるように読んだ。

女性が結婚せずに、家庭に入らずに、独りで生きていくこと。しかもなにかと便の良い都会のアパートメントではなく、自然豊かな一軒家での独り暮らし。ある程度若く元気なうちはまだいい。だけどいったいいつまでそんな「我儘」を通すことができるのか。

『独り居の日記』の時の作者は五十代後半。二十代のときには老人と思って読んだけれど、もうすぐ五十になる今の自分からすれば、五十代は、精神も肉体もまだまだ若い。老いは始まっていても、老人と呼べるような年齢ではない。

今回刊行されたのは、『70歳の日記』。日記としては五冊目の邦訳作品となる。古希を迎えた作者は、多くの友人に助けられて、「独り居」を維持していた。名声を得て、ファンレターの返事書きに膨大な時間を費やし、訪れる客人をもてなしながらも、独りでいる時間を作れないことを嘆く偏屈ぶりは、健在。思索を深め、華やかな実り多き晩年を享受する一方で、老いながら生きる寂しさ、不自由さ、苛立ちや不安が綴られる。

生き先の不安は消えなくても、彼女の日記を生きる指針として必要とする女性は多いはず。残り三冊の日記の邦訳が待ち遠しい。

（うちざわ・じゅんこ　文筆家、イラストレーター）

▽**サートン『70歳の日記』**（本面下広告）**『独り居の日記』**［新装版］（七面下広告）

全貌をはじめて明らかに

《シベリア抑留関係資料集成》

富田武・長勢了治編

シベリア抑留問題については、今日まで、私家版を含め、ゆうに二〇〇〇冊を超える回想記類が刊行されてきた。だが、客観的な資料にもとづいた資料集はいままで存在しなかった。シベリア抑留から七〇年以上が経過し、旧ソヴィエト連邦が保持していた資料も開示された今、本書に収録された一九三編の資料および付録類によって、シベリア抑留以前の詳細から各地域での抑留の実態、帰還および帰還後の問題、冷戦下のかけひきなど、その全貌がはじめて明らかにされる。

本資料集成の特徴を整理するなら、（1）旧ソ連の公文書や米国および米占領軍の公文書を掲載するマルチ・アーカイヴァルな構成によって、客観的・立体的に流れを知ることができること、（2）極東・シベリア・モンゴル・中央アジア・北朝鮮・南樺太など、ソ連中央の指令どおりには貫徹されなかった各地の収容所の実情や特徴が明らかになったこと、（3）「民主運動」を知るために『日本新聞』はじめ一般新聞や政党、帰還者団体の新聞も掲載したこと、などが挙げられる。また、ロシア語からのものを中心に、翻訳が約半分を占める。巻末には、これまで刊行された「シベリア抑留体験記」のほぼ全てを収めた膨大な書誌を付す。

戦後七〇年をへてようやく実現できたこの画期的な資料集成は、抑留体験者および遺族、その関係者・団体・機関はじめ、現代史や戦争関連書に関心のある読者に新たな知見をもたらすだろう。図書館必備。内容見本進呈。［現代史］【一月下旬刊】（A5判函入・980頁・予一八〇〇〇円）

みすず書房新刊

（2016・1～11）2

東京・文京・本郷5　TEL〇三三八一四一〇三三（価格は税別です）

［5月］

科学の曲がり角　研究所　ロックフェラー財団　ニールス・ボーア　オーセルー　研究所が経済援助を受けるとどうなるか。その起源をボーア研とロックフェラー財団から考察。**矢崎裕二訳　八二〇〇円**

怪物君　［6月］　**吉増剛造**　大震災から五年、詩業を賭けて生まれた長篇詩。言葉の土台が崩れた場所から途方もないビジョンが出現する。**四二〇〇円**

なぜ近代は繁栄したのか　草の根が生みだすイノベーション　フェルプス　繁栄の個人主義、停滞のコーポラティズム。ノーベル経済学賞受賞者が長期停滞の処方箋を提示。**小坂恵理訳　五六〇〇円**

遠読　〈世界文学システム〉への挑戦　モレッティ　コンピュータを駆使して古今東西の文学を分析し、世界文学研究に新たな展望を拓く革新的論考。**秋草俊訳　四六〇〇円**

奴隷船の歴史　レディカー　海に浮かぶ地獄における残忍と強欲、抵抗を現前させる筆致。闘う歴史家による黒い大西洋史。**上野直子訳　六八〇〇円**

死すべき定め　死にゆく人に何ができるか　ガワンデ　長寿時代の終末期をどう生き、最期の時をどう迎えるか。現役外科医が描く迫真のドラマ。［8刷］**原井宏明訳　二八〇〇円**

思想としての〈共和国〉　日本のデモクラシーのために［増補新版］　ドゥブレ／樋口／三浦／水林／水林　政治理念から軍備そして学校教育制度まで。危機的政治状況下の憲法と日本を問う。**四二〇〇円**

［7月］

ヘンリー・ソロー　野生の学舎　今福龍太　歩くこと、孤独、自然。文明社会のなかで真に自由な生き方を考え抜いたソロー。生誕二百年、その根源に迫る。**三八〇〇円**

過去をもつ人　荒川洋治　読書と日本語の新しい情景を見続けてきた著者による最新エッセイ集。今年度毎日出版文化賞「書評賞」受賞。**二七〇〇円**

若き科学者へ［新版］　メダワー　科学者を志す者が心に留めるべき助言の宝庫としてNature誌も推薦する不朽の名著。**結城浩解説　鎮目恭夫訳　二七〇〇円**

70歳の日記　サートン　残り少ない時間と孤独のなかで探した「年をとらない秘訣」。出会い、喪失、発見にみちた濃密な一年。**幾島幸子訳　三四〇〇円**

精神医学歴史事典　ショーター　精神医学の総体を知るために書かれた歴史事典。時代や地域を越えて関連する二一一項目。**江口・大前監訳　九〇〇〇円**

民主主義の内なる敵　トドロフ　シリア内戦、IS、難民、テロ。「進歩、自由、人民」というリベラルな理念がもたらす危機とは何か。**大谷尚文訳　四五〇〇円**

［8月］

キッド　僕と彼氏はいかにして赤ちゃんを授かったか　サヴェージ　男二人＋養子＝家族。新しい家族の形を提示する痛快ノンフィクション。社会はきっと変わる。**大沢章子訳　三二〇〇円**

ザ・ピープル　イギリス労働者階級の盛衰　トッド　福祉先進国から新自由主義先進国へ。トマ・ピケティのU字曲線上を「人びとは どう生きてきたのか？**近藤康裕訳　六八〇〇円**

ユング　夢分析論　ユング　「夢の本質について」「象徴と夢解釈」など6編。臨床家ユングの現場を生々と伝える。**横山博監訳　大塚紳一郎訳　三四〇〇円**

小さな建築［増補新版］　富田玲子　心地よく暮らすための設計とは。手がけた建築、生い立ち、そのすべてを語る。「建築オノマトペ」を増補。**二八〇〇円**

［9月］

ミクロストリアと世界史　歴史家の仕事について　ギンズブルグ　些細に見える事例研究から何が見えてくるか。ミクロストリア研究の真髄を堪能する7篇。**上村忠男編訳　四二〇〇円**

生命、エネルギー、進化　レーン　生とは何か？「エネルギー」「呼吸」を手がかりに、生命進化を解読し直す。圧倒的なスケールの科学書。**斉藤隆央訳　三六〇〇円**

治安維持法の教訓　権利運動の制限と憲法改正　内田博文　議会審議と大審院判例を読解し、制定と運用過程を検証。共謀罪等が招く国民統制システムを刑法学から描出。**九〇〇〇円**

明治知識人としての内村鑑三　その批判精神と普遍主義の展開　柴田真希都　国や民族といった所与を超えて普遍的価値を追求した内村を、サイード他の知識人論に照らして再検証する。**七五〇〇円**

［10月］

罪と罰の彼岸　打ち負かされた者の克服の試み［新版］　アメリー　仮借ない現実を前にする時、人間はいかに弱いものか。二〇年の沈黙の後アウシュヴィッツを考察。**池内紀訳　三七〇〇円**

来春一月 刊行開始

中井久夫集［全11巻］

その透徹した知性と柔らかな感性で、われわれの時代に鮮かなしるしを刻んできた精神科医・中井久夫。半世紀におよぶ思考と実践の道筋を追う。

刊行のことば

日本の精神医学に新たな道を切り拓き、透徹した理性と柔軟な感性、研ぎ澄まされたアンテナ感覚で人と時代を捉えてきた精神科医・中井久夫。専門論文であれ、エッセイであれ、小サークルに向けたことばであれ、区別することのないその気品あふれる文章は、詩集を始めとする翻訳ともども、多くの読者の心に響いた。一九六四年にペンネームで発表した論考から東日本大震災以後まで、半世紀にわたり世に届けつづけた作品の数々をここに年代順に編み、著者の歩みの一端を共有したいと考える。

推薦のことば

類い希な叡智、まさしく本物の品性、時代や社会を全体的に鋭く深く的確に捉えつつ、かたや声を挙げる術を持たず、日陰に苦しむ人々へも眼差しを向ける社会性の結実がここにある。この著者の世界に触れる幸せ！

村瀬嘉代子（臨床心理学者）

＊

気品。高雅。透徹。この比類のない賢人と同時代を生きられた幸運を慶ぶ。中井久夫先生の思索は、内に閉じ小さく縮こまろうとするわたしの心と身体を、絶えず外に向けて開きつづけてくれた。

松浦寿輝（作家・詩人）

この人と同時代に生きていてよかった…と思えるオジサマのひとりが中井久夫さん。精神病についても、災害についても、この人がいたおかげで日本の社会はどれだけ変わっただろう。詩とエッセイにはいつも目を洗われるし、時評にはいつも背筋をゾクリとさせられる。

上野千鶴子（社会学者）

＊

知性とはテクノロジーと同じほど危険な道具で、人を凶暴にも尊大にも愚かにもさせるものだが、中井久夫は知性本来の崇高さの中で文章を肉声で静かに語るように書く。私は同時代に生きられたことを奇跡と感じる。

保坂和志（小説家）

＊

トラウマの領域は、ヒステリーのように胡散臭いか、あるいは反戦や女性運動のように政治的かという両極端を揺れ動いて、まともな精神科医が相手にするものではないように長年思われてきた。中井先生は明晰でみずみずしい言葉によって、日本の状況を変えてくださった。

小西聖子（臨床心理士・精神科医）

＊

時には花の香にふくらむ春風のような甘やかな言葉遣いをする、あたたかい叡智と、透徹した明察と、この世の正を求める情熱とを兼ね備えた友人を、一人あなたは書架に持ちたくはないか。名を中井久夫と言う。

佐々木中（作家・哲学者）

＊

文系と理系の壁を易々と乗り越えた、ウイルス学者の父も政治学者の私も心して読まねばならない著作集。それが「中井久夫集」だ。拙著『大正天皇』は、3巻所収の「『昭和』を送る」から着想を得ている。

原武史（政治学者）

＊

精神医学の核心へとつらなるいくつもの道筋、時代を画する臨床＝治療論、ヒトが生き・病み・老いることをめぐって広がるさらなる思索。年代順に編まれた「中井久夫集」からそれらすべてがあふれだしてくる。

江口重幸（精神科医）

＊

おだやかな言葉なのに、強い。自分が道を見失っている気がするとき、この強さにふれると、諭されたように正気に返る。「中井久夫集」は、漂流するわが本棚の、錨となってくれるだろう。

渡邊十絲子（詩人）

＊

この全集に収録されている三〇〇本を越えるエッセイの表題をチェックしているうちに、唖然としてしまう。「認知症に手さぐりで接近する」「現代中年論」「クラス会に出る」「いつも誰かが被災地に」等々。やっぱり中井久夫さんはすごい！

富山太佳夫（英文学者）

＊

中井先生のご本はもう書棚にぎっしり。全集のスペースに悩ましいけれど、やはり揃えたい。年代順の編集で1巻から読み進めば、ときには大河ときには清流のような先生の長い思索の流れを深くたどってゆけるからである。

滝川一廣（精神科医）

＊

中井先生の著作は、ヴァレリー／身体／生理学をめぐる私の思索の導き手でした。特にリズムに対する視点には目が開かれました。

伊藤亜紗（美学者）

＊

医学生の頃からこのかた、壁にぶつかるたびに中井先生の本を開いてきた。迷ったときに採るべき途を照らす北極星のような先生の著作の数々が、一斉に世に出ることは、これからの人たちにも、きっと大きな導きと励ましになることでしょう。

津田篤太郎（漢方医）

＊

中井の尋常ならざる博識と、難解な思想を見事に翻案してみせる卓抜なセンスに触れる者は、この知性に飲み込まれる恐怖を体験する。だが、彼は同時にそれをケアする能力にも長けていた。読むのを恐れることはない。

松本卓也（精神科医）

＊

中井久夫氏は文系・理系の枠組みを超えた存在だ。私達は彼を通じて、そのどちらもが人間の存続にとって必須のものであることを知るに至る。

名越康文（精神科医）

＊

臨床家としての中井久夫氏の文章は、まるで3Dの投影機のようだ。私は何度も、行間から医師と患者さんの姿が浮かび上がるのを見て、やり取りの声を聴いた。そのときの感触を頼りに、私はいまも臨床を続けている。

香山リカ（精神科医）

全巻構成

1　働く患者　1964–1983

現代社会に生きること／サラリーマン労働／ポーの庭園／統合失調症における「焦慮」と「余裕」／世に棲む患者／精神科医としての神谷美恵子さん／他　（20編）

2　家族の表象　1983–1987

日本の家族と精神治療／「つながり」の精神病理／神戸の光と影／私の日本語作法／きのこの匂いについて／親の成熟と子どもの自立／精神科医の弁明／他　（37編）

3　世界における索引と徴候　1987–1991

意地の場について／医療における合意と強制／微視的群れ論／私の仕事始め／統合失調症の精神療法／「昭和」を送る／R・D・レインの死／家族の深淵／他　（26編）

4　統合失調症の陥穽　1991–1994

精神科医がものを書くとき／隣の病い／多重人格をめぐって／Y夫人のこと／ある少女／精神病棟の設計に参画する／クラス会に出る／詩の基底にあるもの／他　（32編）

5　執筆過程の生理学　1994–1996

旗のこと／近代精神医療のなりたち／日本に天才はいるか／災害がほんとうに襲った時／精神科医の見た二都市／震災後の動植物／さいはての仮設住宅にて／他　（28編）

6　いじめの政治学　1996–1998

喪の作業としてのPTSD／訳詩の生理学／医師は治療の媒介者／赤と青と緑とヒト／二年目の震災ノート／精神科治療環境論／ボランティアとは何か／他　（30編）

7　災害と日本人　1998–2002

いろいろずきん考／トラウマとその治療体験／阪神間の文化と須賀敦子／安克昌先生を悼む／犯罪の減少と少年事件／医学・精神医学・精神療法は科学か／他　（32編）

8　統合失調症とトラウマ　2002–2004

甲南裏山物語／図書館に馴染まざるの記／「踏み越え」について／母子の時間、父子の時間／日本の家族／グローバリズムの果て／生活空間と精神健康／他　（32編）

9　日本社会における外傷性ストレス　2005–2007

戦争と平和についての考察／ヴァレリーと青年期危機／樹をみつめて／ウイルス持続感染が起こすいたずら／日本人の宗教／虹の色と精神疾患分類のこと／他　（28編）

10　認知症に手さぐりで接近する　2007–2009

SSM、通称丸山ワクチンについての私見／辞書からみた伝統と文化／国内外の精神医学の動向一端／私が面接で心がけてきたこと／現代医学はひとつか／他　（28編）

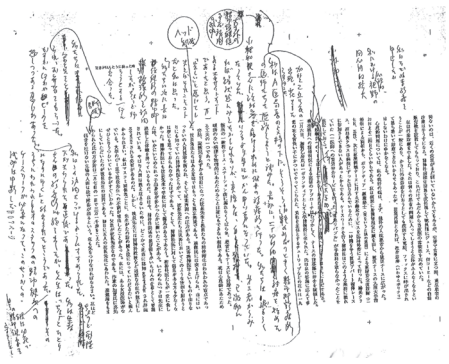
11　患者と医師と薬のヒポクラテス的出会い　2009–2012

中医学瞥見の記／笑いの生物学を試みる／在宅緩和ケアに関与する／東日本巨大災害のテレビをみつつ／戦争から／神戸から／統合失調症の有為転変／いつも誰かが被災地に／他　（37編）

＊各巻末に、ノンフィクションライター最相葉月による解説が付きます

＊第11巻末には、「中井久夫著作総目録」を収録予定です

［第一回配本］
第1巻　働く患者
一月中旬刊
（予価三二〇〇円）



阪神淡路大震災の直後、多忙のさなかに著書『災害がほんとうに襲った時』の刊行のためファクシミリで送られた校正刷の直し

■中井久夫が発表した文章（一九六四―二〇一二）を年代順に編集し、全11巻で構成

■精神医学の高度の専門論文、小社刊『最終講義』『西欧精神医学背景史』、および他社刊行の『分裂病と人類』『精神科治療の覚書』『治療文化論』などの単行本は除く

■底本は単行本（および文庫版）に依拠し、単行本収録のさいに加えられた文章などもほぼそのまま収載

■『記憶の肖像』（一九九二）以後の小社刊の単行本に収められた文章、また、それ以前は『中井久夫著作集』（全6巻、岩崎学術出版社、その後一部「ちくま学芸文庫」）および『精神科医がものを書くとき』（全2巻、広英社、その後一部「ちくま学芸文庫」）に収められた中から主要なものを収録。単行本未収の文章も少々含む

■四六判上製　各巻平均320頁

■明年一月刊行開始、三カ月に一冊を、巻数順に刊行

みすず書房の電子書籍

全68点（2016年12月現在）

＊ 電子書籍の価格表示は希望小売価格です（税別）

テクノロジーは貧困を救わない
外山健太郎　松本 裕訳　¥3500

死すべき定め
死にゆく人に何ができるか
A. ガワンデ　原井宏明訳　¥2800

野生のオーケストラが聴こえる
サウンドスケープ生態学と音楽の起源
B. クラウス　伊達 淳訳　¥2400

悩む力
べてるの家の人びと
斉藤道雄　¥1600

治りませんように
べてるの家のいま
斉藤道雄　¥1600

手話を生きる 少数言語が多数派日本語と出会うところで
斉藤道雄　¥2600

11月配信開始

生命、エネルギー、進化
ニック・レーン　斉藤隆央訳 ¥3600

貧乏人の経済学 もういちど
貧困問題を根っこから考える
バナジー／デュフロ 山形浩生訳 ¥3000

善意で貧困はなくせるのか？
貧乏人の行動経済学
カーラン／アペル 清川幸美訳 ¥3000

なぜ近代は繁栄したのか
草の根が生みだすイノベーション
E. フェルプス　小坂恵理訳 ¥5600

大脱出
健康、お金、格差の起原
A. ディートン　松本 裕訳 ¥3800

21世紀の資本
T. ピケティ 山形・守岡・森本訳 ¥4400

10月配信開始

ピダハン「言語本能」を超える文化と世界観
D.L.エヴェレット　屋代通子訳 ¥3400

信じない人のための〈宗教〉講義
中村圭志　¥2000

オシムの伝言
千田 善　¥1900

夜と霧［新版］
V.E.フランクル　池田香代子訳 ¥1200

夜と霧
ドイツ強制収容所の体験記録
V.E.フランクル　霜山徳爾訳 ¥1500

暴力について
共和国の危機
H. アーレント　山田正行訳 ¥3200

8月配信開始

キッド　僕と彼氏はいかにして赤ちゃんを授かったか
ダン・サヴェージ　大沢章子訳 ¥3200

地に呪われたる者
F. ファノン　鈴木・浦野訳　¥3800

夜間飛行
サン=テグジュペリ 山崎庸一郎訳 ¥1200

平和か戦争か
戦時の記録 1
サン=テグジュペリ 山崎庸一郎訳 ¥2200

ある人質への手紙
戦時の記録 2
サン=テグジュペリ 山崎庸一郎訳 ¥2200

心は二十歳さ
戦時の記録 3
サン=テグジュペリ 山崎庸一郎訳 ¥2200

小さな哲学史
アラン　橋本由美子訳　¥2200

三ギニー
戦争と女性
V. ウルフ　出淵敬子訳　¥2200

生きがいについて
神谷美恵子コレクション
柳田邦男解説　¥1200

詩心の風光［新版］
片山敏彦　¥2400

水の音楽
オンディーヌとメリザンド
青柳いづみこ　¥2400

書評コラム 2

一九五〇年代、労働者の夢を生き直す

佐藤 泉

道場親信
《下丸子文化集団とその時代》を読む

一九六〇年代の日本は「経済」を政治課題とすることによって、みごとに高度成長を実現させた。それは同時に「政治」本来の課題を棚上げし、不可視化することを意味してもいた。豊かになって何が悪い？というかもしれない。だが、豊かさという価値には、自分たちが何を忘れたかを忘れさせる効果がある。六〇年代は、それ以前の人々の見た夢、その豊かな記憶を上書きしたが、本書はそれを再想起する作業である。

本書の舞台となる「東京南部」はその地域の労働者にとって特別の意味をもっていた。軍需工場の集中した大田区域は、戦争末期、米軍による爆撃にさらされたが、戦前からの労働運動の伝統のあるこの地域では早くから運動の立ち上がりを見せた。人々は労働組合を組織するとともに、自分たちを文化的に組織し、文学、演劇、美術、音楽などの職場サークルを続々と生みだしていた。

大田区「下丸子」には、米軍戦車を修理する三菱重工系のPD工場（軍管理工場）があり、通用門にはカービン銃を持った米兵が立ち、ガードマンが従業員の所持品検査をしていた。朝鮮戦争が勃発するとまもなく、この下丸子工場で四五人の労働者にレッドパージが通告されたが、彼らがこれに抵抗し実力闘争を展開したことで、「下丸子」の名は一躍象徴的な意味を持つようになる。これは占領下での労働運動弾圧事件であったばかりではない。この時期の日本の軍需工場は朝鮮戦争の後方勤務の場となっており、そこでなされる抵抗は、海を隔てたアジアに連帯する反戦平和の意味をあわせ持つことになる。この工場街で、労働者たちは抵抗詩を書き、ガリ版刷りの詩誌を作り、サークル相互で連絡しあって自分たちを組織化した。

その文学は政治から距離を取ることによって自らを純化する「文学」ではなかった。

一九五〇年代当時、全国の職場、地域に文化サークルが存在し、おびただしい数のサークル誌が発行されていた。人々は仕事が終わると集まり、詩を作り、鉄筆で原紙に文字を刻んだのである。今回、道場親信が「下丸子文化集団」の活動を軸として復元したのはその「無名」の人々の情熱であり、彼らの連携が生み出した運動のダイナミックなうねりである。「下丸子文化集団」の活動は、一九五一年春から五九年までの時期にわたった。五〇年代のコミュニストたちは当時の共産党分裂による混乱の影響を避けられず、「下丸子文化集団」もこの時期に、発足以来の有力なメンバーが離脱したことで危機を迎え、また文化方針の転換によって深い挫折感を舐めてはいる。しかし、彼らは危機のたびに自分たちの軌道を立て直し「文化集団」「工作者」としての自身を再創出した。彼らにとって、政党の文化方針は単に上意下達の指令ではなく、自分たちの潜在的活動力を噴出させる触媒だった。それゆえ彼らは自分たちの運動のベクトルを自ら作り出し、自律的な運動を展開しえたのである。だから、時に仲間を失い、時に政治的挫折を味わったにもかかわらず、そのたびに自らを生み出しつつ、運動は五〇年代を通して継続した。道場氏の記述はきわめて繊細であり、彼らの危機意識、問題意識を彼ら自身に即して読み取り、それによって「文化集団」の運動が実践的に、また理論的にも「政治と文学」「知識人と大衆」「専門家と素人」といった根深い対立軸を脱構築していくプロセスをみごとに復元してみせている。なかんずく、若き「工作者」江島寛、植民地期朝鮮に生まれ、危機の時代の「文化集団」を建て直したこの詩人の議論からは、文化運動が既存の「文学」の輪郭そのものを変えていく可能性すら感じられる。あまりに若くして逝った江島を記述する著者の文からは哀悼の響きが聞こえてくる。

こうした研究にあたって最大の難問となるのは資料体の保存状況だ。文化が文化商品として立ちあらわれる時代が訪れるとともに、サークル誌の多くは埋もれ、散逸した。にもかかわらず本書のような詳細にわたる研究が可能になったのは、運動当事者や、その意味をよく知っている少数の人々によって下丸子のサークル誌が保存されていたことによる。当時のメンバーたちは後に、さまざまな形で「文化」の仕事に就くことになるが、その後も彼らは繰り返し五〇年代に立ち返り、資料の散逸を食い止め、その運動の意味を検証して自分たちに歴史を与える作業を独自に行っていた。そして機が熟し、ゆくりなくも道場氏らの研究グループがこれにめぐりあい、瞠目した。氏は五〇年代サークルの経験に立ち返るこの研究自体が「サークル」の運動になっていたと書いている。運動の体験は単に体験すること以上に、本人が、あるいは後から来た者が、その体験を「生き直す」ことこそが重要なのだと、道場氏が前著『占領と平和』に書いていたことを思い出す。

本書は、雑誌『人民文学』の分析、詩と音楽のサークル活動家のコラボレーションによって「民族独立行動隊の歌」「原爆を許すまじ」が生れたプロセスなど重要な章を含むが、ここでは紹介しつくせない。当時の人々は自分たちを表象し、自分たちの歌を持っていた。そのための場を持っていた。そしてそのための場なことである。

（さとう・いずみ　日本近代文学　青山学院大学）

▽道場親信『下丸子文化集団とその時代』

（次面下に広告）

中井久夫　略歴

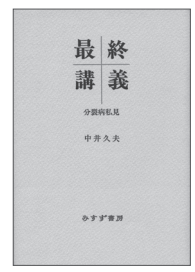
一九三四年奈良県生まれ。京都大学医学部卒業。神戸大学名誉教授。精神科医。著書『中井久夫著作集――精神医学の経験』全6巻・別巻2（岩崎学術出版社、一九八四―九一）『分裂病と人類』（東京大学出版会、一九八二、二〇一三）『精神科治療の覚書』（日本評論社、一九八二、二〇一四）『治療文化論』（岩波書店、一九九〇）『こんなとき私はどうしてきたか』（医学書院、二〇〇七）『私の日本語雑記』（岩波書店、二〇一〇）『日本の医者』（日本評論社、二〇一〇）ほか。みすず書房からは、この『中井久夫集』に収録しない『最終講義』（一九九八）『西欧精神医学背景史』（一九九九、新装版二〇一五）以外に、16冊の単著、3冊の共著がある。翻訳書も、みすず書房からサリヴァン、ヴァレリー、カヴァフィスなど20冊以上を刊行。

中井久夫　既刊より

（左記の単行本は、『中井久夫集』には含まれません）

『最終講義――分裂病私見』

一九九七年三月五日、聴衆で立錐の余地のない神戸大学医学部第五講堂で、文字通りの第一人者が三十年間を語り下ろした最終講義。（二〇〇〇円）



『西欧精神医学背景史』

幾多の分水嶺を持ちながら古代から現代に至る精神医学の流れを、西欧の宗教的倫理観・人間観との関連の中で縦横無尽に論じたユニークにして驚嘆の書。（二八〇〇円）

中井久夫　翻訳書より

ジュディス・L・ハーマン『心的外傷と回復』［増補版］

トラウマ問題の〈バイブル〉と呼ばれる書。（六八〇〇円）

H・S・サリヴァン『精神医学は対人関係論である』

著者の死後出版された最初の講義録。成長の各発達段階において対人関係の重要性を説明。（七八〇〇円）

クッファー他編『DSM-V研究行動計画』（共訳）

現行の『精神疾患の診断・統計マニュアル』の問題点を洗い出し、精神医学の展望と課題を集成。（七二〇〇円）

『ヴァレリー詩集　コロナ／コロニラ』（共訳）

恋人に宛てた最後の詩集の初公刊。最晩年の詩人の結実とその思考の鍵を明かす。（三八〇〇円）

R・リデル『カヴァフィス　詩と生涯』（共訳）

二〇世紀最大のギリシャ語詩人の生を立体的に描きつつカヴァフィス詩についての詳説を展開。（五二〇〇円）

みすず書房の電子書籍　全68点（2016年12月現在）

＊ 電子書籍の価格表示は、希望小売価格です（税別）

最終講義　分裂病私見　中井久夫　¥1600
臨床瑣談　中井久夫　¥1400
臨床瑣談 続　中井久夫　¥1500
災害がほんとうに襲った時　阪神淡路大震災50日間の記録　中井久夫　¥900
復興の道なかばで　阪神淡路大震災一年の記録　中井久夫　¥1200
福島の原発事故をめぐって　いくつか学び考えたこと　山本義隆　¥800
森のなかのスタジアム　新国立競技場暴走を考える　森まゆみ　¥2400
「日本国憲法」まっとうに議論するために［改訂新版］　樋口陽一　¥1800
夜のある町で　荒川洋治　¥2000
世に出ないことば　荒川洋治　¥2000
知恵の悲しみの時代　長田弘　¥2000
谷中、花と墓地　サイデンステッカー 山口徹三編　¥1900
ちいさなカフカ　池内紀　¥1600
なじみの店　池内紀　¥1700
無口な友人　池内紀　¥1700
あだ名の人生　池内紀　¥2000
寺田寅彦と現代　等身大の科学をもとめて　池内了　¥2000
あたまの目　人生の見かた　外山滋比古　¥1400
忘却の力　創造の再発見　外山滋比古　¥2000
いのちをもてなす　環境と医療の現場から　大井玄　¥1400
通り過ぎた人々　小沢信男　¥1900
ブルームズベリーふたたび　北條文緒　¥1900
ふるほん行脚　田中眞澄　¥1900
随時見学可　大竹昭子　¥1700
読書教育　フランスの活気ある現場から　辻由美　¥1900
通訳者と戦後日米外交　鳥飼玖美子　¥3000
村上春樹短篇再読　風丸良彦　¥2000
村上春樹〈訳〉短篇再読　風丸良彦　¥2000
傍観者からの手紙　FROM LONDON 2003–2005　外岡秀俊　¥1600
小さな町で　〈大人の本棚〉　Ch.-L. フィリップ　山田稔訳　¥1900
ミル自伝　〈大人の本棚〉　J. S. ミル　村井章子訳　¥2200
『悪霊』神になりたかった男　〈理想の教室〉　亀山郁夫　¥1000
『パンセ』数学的思考　〈理想の教室〉　吉永良正　¥1000
『白鯨』アメリカン・スタディーズ　〈理想の教室〉　巽孝之　¥1000
カフカ『断食芸人』〈わたし〉のこと　〈理想の教室〉　三原弟平　¥1000
バッハ『ゴルトベルク変奏曲』世界・音楽・メディア　〈理想の教室〉　小沼純一　¥1200
エジソン 理系の想像力　〈理想の教室〉　名和小太郎　¥1200
ランボー『地獄の季節』詩人になりたいあなたへ　〈理想の教室〉　野村喜和夫　¥1200
東アジア人文書100　東アジア出版人会議編　¥1900

＊電子書店により取扱のタイトルに若干の違いのある場合がございます
＊小社ウェブサイトにもご案内
http://www.msz.co.jp/book/ebook/

最後のエッセー集

長田弘
《幼年の色、人生の色》

昨年の五月に亡くなった詩人が最後に編んでいた、自選エッセー。晩年の仕事（Later Works）といえる文章に加え、旧作から再録したとくに愛着の深い数篇の三八篇から成っている。

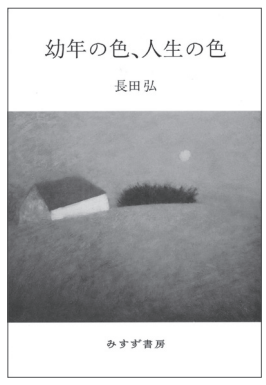
標題作は幼少の記憶である。「そのとき何を考えていたか覚えていなくとも、そのときそのじぶんをつつんでいた時間の色あいは、後になればなるほど、じぶん自身の人生の色として、記憶のなかにますますあざやかになる。」

詩人はなによりも読書の人だった。『灯りの下に自由あり』。灯りの下の自由は言葉なりき。』最初に手に入れた、首の曲がる、じぶんだけの電気スタンドの下で見つけてからずっと、いまも胸中にあるわが箴言です。」

詩人はかつてクルマを運転してアメリカのほとんどの州を走り抜けた。「雨にけぶるブルーグラスの州ケンタッキーの、静かでうつくしい街レキシントンのショッピング・モールで、金いろにかがやいてゆっくり回ってゆくメリー・ゴー・ラウンドを見ていたとき、ふっと抱いた一瞬の思いを、いまもまだ鮮明に覚えている。人生とよばれるものは、一周するたびに一つずつ歳をとってゆく回転木馬のようなものだと。」

来日公演のボブ・ディランについて、二十一世紀のホイットマンだと見抜いた一文も、さすがである。好評重版。

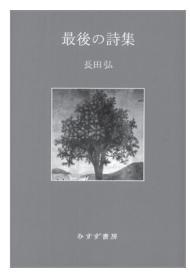
［エッセー・人生論・音楽］（四六判・192頁・二四〇〇円）



■既刊より

ボブ・ディランのノーベル文学賞受賞に関して、『幼年の色、人生の色』に収められた一篇「二十一世紀の『草の葉』」が話題になっている。朝日新聞の近藤康太郎記者は「長田弘はアメリカ音楽にも詳しかった」と言う。四〇代に自分の運転で合衆国ほとんど全部の州を旅しながら、ラジオやライブで体験もした。今では消えた渋谷のレコード店に出入りしていた。そこから生まれた本が『**アメリカの心の歌** expanded edition』（二六〇〇円）である。

二〇一五年、詩人が亡くなる前に精魂込めて完成させた『**長田弘全詩集**』（六〇〇〇円）は半世紀にわたる十八冊の詩集すべてを収録している。それ以降に書かれた詩は、没後『**最後の詩集**』（一八〇〇円）としてまとめられた。この二冊をもって長田弘の詩の全貌が見渡せることになる。

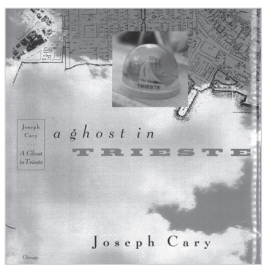


■福島県立図書館に長田弘文庫

長田弘さんの和洋八〇〇〇冊におよぶ旧蔵書が、御遺族の厚意により故郷福島県立図書館に一括寄贈されました。図書館ではこれを整理保管の上で「長田弘文庫」として明年二月より公開する予定です。

失われた時空の文学紀行

ジョーゼフ・ケアリー《トリエステの亡霊》
鈴木昭裕訳　サーバ、ズヴェーヴォ、ジョイス



イタリアの北東端、現在はスロヴェニアと国境を接する港湾都市トリエステは、須賀敦子の翻訳したサーバの詩でわれわれに身近になった。

アメリカ人イタリア文学研究者のケアリーも、この詩の魅力の虜となり、第一次大戦直前にサーバと同じ空気を吸っていた小説家、ジェイムズ・ジョイスとイタロ・ズヴェーヴォの三人で形づくる三角形を夢見て、七十年後のトリエステに滞在する。

ガイドブックを頼りに残り香をもとめてさまよい歩く著者に、文学的トリエステはなかなか姿を現さない。その代わりこの町の重層的な歴史と人物たちが浮かび上がる。

三人の詩人・作家の他にも、フロイト、マリネッティ、モンターレ、ロッセッティなどが、この町に姿を現わし、言葉を残しながら、亡霊のように消えてしまうのだ。

かつて栄えたオーストリア＝ハンガリー帝国の都市だった町の何処に、三角形の証明はあるのだろう？　ミステリータッチの文学研究エッセー。写真・地図多数、登場人物名簿を附す。［海外文学・歴史・紀行文］【一月下旬刊】（A5変256頁・予五〇〇〇円）

歴史と文学のあいだ

草光俊雄《歴史の工房　英国で学んだこと》

知る人ぞ知る文人学者、待望の論文エッセー集。既刊の『明け方のホルン』は、第一次大戦で戦死したマイナー・ポエットの列伝として、多くの読書人をうならせた。

イギリスに留学した草光俊雄は、シェフィールド大学で博士となった後、ジョセフ・ニーダム研究所に勤めた。その長い英国経験がもたらしたのは、知識のみならず、学問の姿勢と手つき、生活と一体化した美学でもある。

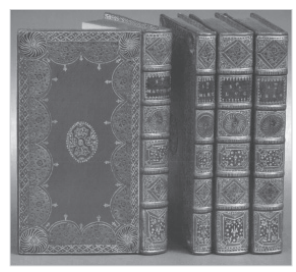
放送大学の講義ヨーロッパ史の洒脱な語り方からも、その魅力は察することができよう。社会経済史における専門は、近代の産業化と手工業やデザインの関わりとひとまず言えるが、本書『歴史の工房』の目次を一見すれば、草光の興味と学識が及ぶ範囲の広さがわかるというものだ。

トレヴェリアン、ピーター・バーク、そして師匠ラファエル・サミュエルについての人物と歴史学を生き生きと語り、鷗外の史伝を論じる。ウィリアム・モリスを軸に十九世紀末の中世主義を、柳宗悦の活動や、ラスキンと御木本隆三と重ね合わせて描く。イギリスの児童書、ブルームズベリ・グループと兵役拒否、近年では植物学と帝国の歴史の連関に着目している。

なお本書の刊行を記念して二月に下北沢の書店B＆Bで予定されている、著者と作家・松家仁之さんとの対談も楽しみだ。［歴史学・文化史・学問論］【十二月下旬刊】（四六判288頁・予四五〇〇円）

三〇〇年前の本づくりの世界

野村悠里《書物と製本術　ルリユール／綴じの文化史》



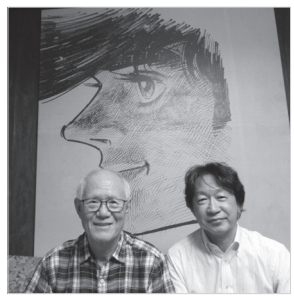
本書が主たる考察対象とするのは、活版印刷が成熟し書物の生産が盛んになり、装幀技術が定着した三〇〇年前の本づくりの世界だ。この時期こそ、きわめて質の高い製本術が発展し、技巧を凝らし、円熟を見せた、歴史上の頂点と言える技が開発された時代である。

一般に装幀というと、デザイン面が取り上げられることが多いが、本書の圧巻は、製本術の専門家としてルリユールに携わってきた著者自身が、本の内部構造、「本の綴じ」に着眼し、分析するところである。装幀・造本をテーマとし、出版文化、出版史、とりわけ技術について精緻に描かれている。書物の歴史や装幀・造本に関心のある人に向けて著された本。［出版文化・文化資源学］【二月刊】（A5判360頁・予七二〇〇円）

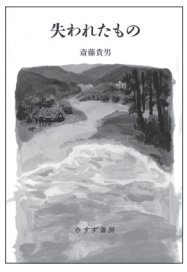
■関連書より▽**M・マクルーハン『グーテンベルクの銀河系――活字人間の形成』**森常治訳（七五〇〇円）**『メディア論――人間の拡張の諸相』**栗原・河本訳（五八〇〇円）▽**E・L・アイゼンステイン『印刷革命』**別宮貞徳監訳（五八〇〇円）▽**平野甲賀『僕の描き文字』**（二八〇〇円）

東京・池袋の少年時代 会心の庶民史

斎藤貴男
《失われたもの》



ちばてつや氏（左）と著者



社会が変わってしまったと感じる人は多いのではないか。時代は新たな殖産興業・富国強兵、米国に寄り添う新しい大日本帝国に向かっているように見える。

なぜ自分は危機的状況をうがつ仕事を続けてきたのだろう。経済ジャーナリストである著者は、自らの根っこを掘り下げる。

十一年間シベリアに抑留された父と東京大空襲の被災者だった母、戦争をひきずる両親は東京・池袋で鉄屑屋を営み、必死に昭和を生き抜いた。

失われたものは、誇りを持って生きていける自営業の暮らしと経済。自律した在り方を許容する社会。少年漫画の熱狂。「みんなが手と手を合わせれば」の歌。「ネーミング詐欺」ではない政治の言葉。いわゆる戦後民主主義は共同幻想だったのかもしれない。現実には戦争も差別もあった。しかし体験に裏づけられた夢だった。当時と、平和と平等の理想さえ抱けない現在との差は、とてつもなく大きい。

失われたものは、とり戻さないと危険だ。

「今、大きな渦があって、私たちはその縁（ふち）にいる…」漫画家ちばてつや氏との二十五年ぶりの対話を収録。著者の初めてのエッセイ集は、会心の庶民史となった。

［エッセイ・現代社会］（四六判・216頁・二七〇〇円）

みすず書房新刊

（2016・1～11）3

東京・文京・本郷5
TEL〇三三八四一〇三三
（価格は税別です）

［10月］
パリはわが町
グルニエ　長老作家がパリの所番地を鍵にして断章で綴る二〇世紀の作家たちの思い出。人生のアドレス帳。**宮下志朗訳**　三七〇〇円

試行錯誤に漂う
保坂和志　書くこと、考えることの自由を筆一本で表す小説家の濃密なエッセイ。芸術の真髄へ誘う21世紀の風姿花伝！　二七〇〇円

映画の声　戦後日本映画と私たち
御園生涼子　大島渚からメロドラマ、実録やくざ映画、角川映画まで、国民の物語の周縁へ追われた他者の声を聴き取る。三八〇〇円

下丸子文化集団とその時代
一九五〇年代サークル文化運動の光芒
道場親信　50年代に若者を席捲したサークル文化運動とは。東京で活躍した下丸子文化集団から見えるもう一つの戦後史。三八〇〇円

ブラジル日系移民の教育史
根川幸男　移民と共に越境した日本の教育。その変容と文化再創造を丁寧にたどる。現在の日本の教育への示唆に富む。一三〇〇〇円

［11月］
果報者ササル　ある田舎医者の物語
バージャー／モア　J・バージャー一九六七年の傑作。無名の村医者の観察を通して人間と医療の本質に迫る。**村松潔訳**　三二〇〇円

芸術の海をゆく人　回想の土方定一
酒井忠康　批評家の泰斗・土方定一への追憶とオマージュ。衣鉢を継いだ〝カマキン〟元館長が問いなおす美術エッセイ。四六〇〇円

ル・コルビュジエから遠く離れて　日本の20世紀建築遺産
松隈洋　国立西洋美術館、ホールを見上げれば富士山が？大学セミナーハウスはなぜ逆ピラミッド？戦後建築「歴史秘話」。三六〇〇円

■新装復刊［3月］
消去
ベルンハルト　二十世紀ドイツ語圏の最重要作家と評価される孤高の著者が描く、比類なき怒濤の圧巻長編。**池田信雄訳**　五五〇〇円

■新装復刊［4月］
精神疾患と心理学
フーコー　その後の理論展開を準備した、著者の最初の著書。狂気を文化の積極的な表現と捉えた問題作。**神谷美恵子訳**　二八〇〇円

災害の襲うとき
カタストロフィの精神医学
ラファエル　被災者の喪失感や仮住い問題からボランティアのストレスまで。メンタル・ケアの重要性を示す。**石丸正訳**　四八〇〇円

アジェのパリ
大島洋　百年前に撮影されたパリを、アジェの視線で歩いてみる。身体感覚の共有により生まれた、奇跡のような写真論。三五〇〇円

映画女優　若尾文子
四方田犬彦・斉藤綾子編著　改めて脚光を浴びる大女優を論じた、画期的な書物。インタビュー＆全出演作データを収録。三八〇〇円

時の震え
李禹煥　韓国での幼年時代の記憶、旅と日常の時間空間への想い、キャンバスを前に心に浮かぶこと…　自伝的エッセイ。四二〇〇円

■書物復権2016　10社共同復刊［5月］
歴史・レトリック・立証
ギンズブルグ　歴史（ヒストリー）は虚構（フィクション）なのか。歴史学における表象と真実をめぐる論集。**上村忠男訳**　三五〇〇円

モードの体系
その言語表現による記号学的分析
バルト　ファッション・ジャーナリズムの記述を分析。人間は衣服と言葉からどのように意味を作るのか？　**佐藤信夫訳**　七四〇〇円

この私、クラウディウス
グレーヴズ　病身で吃音症、帝位など夢みもしなかった謎のローマ皇帝〈自伝〉。タイム誌「小説100選」の傑作。**多田・赤井訳**　四二〇〇円

中国の伝統思想
島田虔次　「儒教文明は未来を紡ぐに足る思想」と確信する立脚点に立った、透徹した中国思想史研究。「明末清初」各論他。五二〇〇円

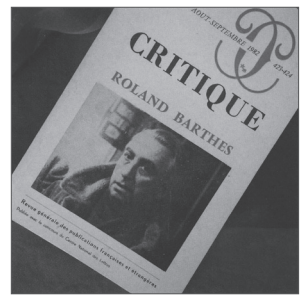
持続可能な発展の経済学
デイリー　環境マクロ経済学の創始者が、環境／共同体の福祉／貧困を架橋する思想を凝縮した書。**新田・藏本・大森訳**　四五〇〇円

■新装復刊［5月］
他の岬　ヨーロッパと民主主義
デリダ　移民問題とテロに揺れるヨーロッパと民主主義を考えるために、新たにおくる。**國分功一郎解説　高橋・鵜飼訳**　二八〇〇円

■新装復刊［7月］
父が子に語る世界歴史［全8巻］
ネルー　インド解放闘争のさなか獄中から一人娘に送った200通の手紙。慈愛と鋭い洞察にみちた感動の名著。**大山聰訳**　各二七〇〇円
1　文明の誕生と起伏　2　中世の世界
3　ルネサンスから産業革命へ　4　激動の十九世紀　5　民主主義の前進
6　第一次世界大戦と戦後　7　中東・西アジアのめざめ　8　新たな戦争の地鳴り
（各巻末に関連地図多数）

ロラン・バルトを探して

アントワーヌ・コンパニョン
《書簡の時代　ロラン・バルト晩年の肖像》
中地義和訳



二〇一五年はロラン・バルト生誕百年。それを機にフランスでは多くの関連書が出版されたが、とりわけ目を引いたのが本書である。文学理論ではバルトを批判してもいるコンパニョンが、何をどう書くのか？「あらゆる面で秀才であるがゆえに天職を見出しかねている若者の文学的キャリアのはじまりと、老境に差しかかった高名で孤独な批評家の晩年とが交差し浸透しあった数年が、四十年近い歳月を経て、記憶の深みから掘り起こされる。」きっかけは昔バルトから受け取った多数の手紙を、機関に寄贈する前に読み返したことだった。

ここに読まれるのは「生き生きとした人間的感触に満ちたバルトの肖像であるとともに、明敏だが未熟さを残す観察者、青年コンパニョンの自画像でもある。しかもこれら二重の肖像は、自らバルトが亡くなった年齢に達したことに気づいて驚く六十四歳のコンパニョンの批評的視線が捉えた肖像である。」

付き合いの流儀が今とは異なっていた「あのころ」のパリにおける学問の世界、出版界、文化人たちのミリューを懐かしさに溺れることなく描き出し、バルトの事故から死に至る時間を惜しみ、深く愛するその著作を経巡るような「ロラン探索」の書である。

［現代思想・学術エッセー］（四六判・216頁・三八〇〇円）

後期の代表作、待望の新訳

ロラン・バルト　鈴村和成訳
《テクストの楽しみ》

「楽しみのテクスト――満足させ、満たし、幸福感を与えるもの。文明からやって来て、文明と決裂することなく、読書の心地よい実践とむすばれるもの。歓びのテクスト――放心の状態におくもの、意気阻喪させるもの。読者の、歴史的、文明的、心理的な基底だとか、その趣味、その価値観、その記憶の一貫性を揺り動かすもの」

「テクストの楽しみ。古典。文明。知性。アイロニー。繊細さ。幸福感。伎倆。安全。歓びのテクスト。楽しみは粉々になる。国語は粉々になる。文明は粉々になる。」

46の断章からなる「読むこと＝書くこと」の無償の実践。「制度としての作者は死んだ」、「テクストは織物である」といった断言によって大いに物議を醸したバルト後期の代表作（旧訳は『テクストの快楽』）が、読みやすい達意の新訳で蘇る。

［文学・批評］【一月下旬刊】（四六判160頁・予二八〇〇円）

ロラン・バルト 新訳と単行本／著作集

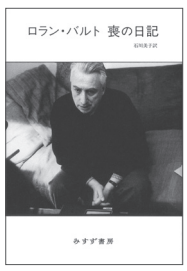
先に二〇〇八年に新訳を刊行している『**零度のエクリチュール**』［新版］石川美子訳は、精妙な註を付したオリジナル版を底本に、第一人者による明晰な邦訳。（二四〇〇円）

また、『ロラン・バルト著作集』［全10巻・未刊1］の第5巻『**批評をめぐる試み**』吉村和明訳は、バルト最初の批評集『エッセ・クリティック』の完全新訳。（五五〇〇円）

この『ロラン・バルト著作集』は、二〇〇二年にフランスで刊行された、新版『ロラン・バルト全集』にもとづく決定版です。単行本未収の論文・対談など、バルトが出版したものすべてを編年順に収め、石川美子・明治学院大学教授が全巻監修。各巻は気鋭の研究者により新たに翻訳、精密な註が付されています。

そして、新訳ではありませんが、今年は『**モードの体系**』佐藤信夫訳を復刊（六面下広告）。また、ロングセラー『**明るい部屋**』花輪光訳は、ジャンルを超え若い読者に読み継がれています。（二八〇〇円）

『**ロラン・バルト　喪の日記**』石川美子訳は、母を失った悲しみからその『明るい部屋』に至る密かな覚書。没後30年にして初公刊。（三六〇〇円）



■関連書　**E・マルティ／A・コンパニョン／Ph・ロジェ『ロラン・バルトの遺産』**石川・中地訳は、晩年を見守り、その仕事を最も直接的に引き継いだ弟子・友人三人による最良のバルト論集。（四二〇〇円）

最新の知見で考察

大谷卓史《デジタル社会の倫理》

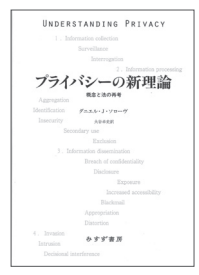
デジタル社会の現在から近未来への課題について、著者が最も専門とする情報倫理学とメディア論に加え、緻密な哲学・倫理学の知見も活用し、今起こっていることを柔軟に分析する。見えにくいこと、見落とされていることを注意深く論じ、各章必ず示唆や発見を導けるように思考がめぐらされている。

「他者危害の原則」のような倫理的原則が、昨今、法律や政策を決めるなかで、かなり無視されがちであるが、本書では、近代社会が築き上げてきた基本原則を厳密に確認するよう試みている。

自由の概念が、情報技術の発展や社会・ビジネスの激変によって揺らいでおり、プライバシーに関する考え方も、大きく変容してきている中、変貌する時代における原則や価値の捉え方について、読者が理解し深く考えるための重要な手がかりを提供する書。最新の知見で考え得るところまで深く考察する。

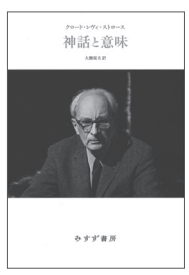
［思想・現代社会論］【三月刊】（四六判480頁・予五〇〇〇円）

■関連書▽**D・J・ソローヴ『プライバシーの新理論――概念と法の再考』**大谷卓史訳（四六〇〇円）▽**名和小太郎『個人データ保護』**（三二〇〇円）



NHK 100分de名著 12月はレヴィ＝ストロース

NHK　Eテレ（教育）の「100分de名著」今月はクロード・レヴィ＝ストロース『野生の思考』がとりあげられています。指南役は、中沢新一（明治大学特任教授・野生の科学研究所所長）。▽『**野生の思考**』大橋保夫訳（四八〇〇円）▽ラジオ放送5講を編んだ彼自身によるレヴィ＝ストロース入門『**神話と意味**』大橋保夫訳は新装版出来（二四〇〇円）



刊行記念イベントが開かれました

保坂和志『試行錯誤に漂う』の刊行を記念して、11月20日（日）青山ブックセンター本店にてトークイベントが開かれました。聞き手は、フランス文学・哲学専攻で「早稲田大学保坂和志の会」メンバー伊藤亮太氏。

小説家の存在に徒手空拳でのぞみ、真正面から「書くこと」への問いが投げかけられた一時間半。言葉自体に抗って、書く自由を確保し押し広げようとする保坂和志さんの生の言葉に耳を澄ました貴重な時間でした。

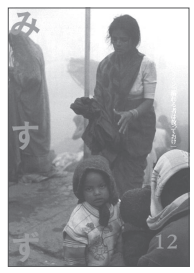
去る11月4日、神田駿河台のエスパス・ビブリオにて、**御園生涼子『映画の声』**刊行を記念したトークショー「戦後日本映画と御園生涼子」が開かれました。

「日本映画の通史を書ける力量のみならず、自らも映画を撮れる人だった」（松浦寿輝氏）。「映画の分析と、社会理論の分析が見事に噛み合った希有な一冊」（吉本光宏氏）。「シネフィル的感性を根にもちながら、あえてそれが通じない読者へ向けて書こうとした」（木下千花氏）。称讃と愛惜の思いにみちた90分でした。

（ともに六面下に広告）

月刊雑誌《みすず》最近号より

三浦哲哉「庄内のワラサ、パリのオムレツ、ベルリンのホットコーヒー」／池内紀「二人のハンス」／上野直子「小さな島から小さな島へ――『奴隷船の歴史』終わらない後書き」（十月号）。大井玄「つながりを求める心」／ブレイディみかこ「フードバンクの勃興とわれわれの衰退」／岡真理「ゲルニカ一九八二」／植田実「ケース・スタディ・ハウス」（十一月号）。ナオミ・クライン「溺れる者は放っておけ――温暖化する世界における「他者化」の暴力」／山本唯人「東京南部界隈――道場親信『下丸子文化集団とその時代』の刊行に寄せて」／舟田詠子「あるナチス親衛隊員の感動と挫折」／三浦哲哉「サンドイッチを噛むうれしさ」／ブレイディみかこ「ザ・フィナーレ　笑い勝つその日のために」（十一月号）ほか。（各三〇〇円）



（十二月号表紙写真　鬼海弘雄）

「読書アンケート特集」と定期購読のご案内

『みすず』次号は、毎年ご好評をいただく「読書アンケート特集」掲載の1・2月合併号です（二月一日発行）。

本誌は原則として郵送による年間購読をお願いしています（年11回発行、一年間の購読料三七八〇円、税・送料込）。

「読書アンケート」特集号のみをご希望の方は、切手四一〇円分（送料込）を直接、みすず書房営業部「みすず」係までお送り下さい。発行次第ご送付いたします。

みすず書房新刊

（2016・1～11）4

東京・文京・本郷5
TEL（三三八一）四一〇三
（価格は税別です）

■新装復刊［8月］

時代精神の病理学　心理療法の26章

フランクル　強制収容所体験を精神科医の眼で記した著者が、第二次大戦前後の社会と心理療法の関係を語る。**宮本忠雄訳　三四〇〇円**

識られざる神

フランクル　無意識の宗教性を鍵に人間存在の本質に眼を向け、実存分析による精神療法への応用を説く。**佐野・木村訳　三四〇〇円**

神経症　その理論と治療

フランクル　理論と実践が最も体系的にまとめられ、精神医学を超えて哲学などへ拡がりを持つ書。**宮本・小田・霜山訳　五四〇〇円**

心理療法論

ユング　療法家を共に体験する者とみなし、患者と同じ弁証法的過程の中に位置付ける。重要6論文の選集。**林道義編訳　二八〇〇円**

個性化とマンダラ

ユング　自立した個体のシンボル＝マンダラの絵に卓抜な解釈を加え、人間の豊かな可能性をまざまざと示す。**林道義訳　三六〇〇円**

転移の心理学

ユング　メルクリウスの泉／王と女王…魂の帰還／新たな誕生…　錬金術の絵10枚で語る転移＝個性化過程。**林・磯上訳　三七〇〇円**

■新装復刊［9月］

独り居の日記

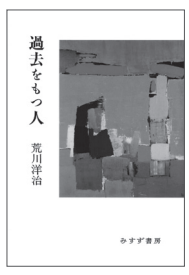
サートン　孤独と友人の両方を大切に、想念を飛翔させた一年間。詩人・小説家サートンの代表作。［好評重版］**武田尚子訳　三四〇〇円**

＊11月の復刊は、次面左上の囲みにご紹介品切書の復刊を随時おこなっています。
＊復刊希望の書籍がございましたらお知らせ下さい

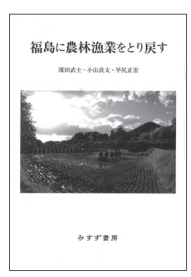
2016年の受賞図書

荒川洋治『過去をもつ人』が、毎日出版文化賞書評賞を受賞しました。同賞は今回をもって終了となりますが、選評に「新刊書を値踏みする書評をさらに評価するというこのユニークな試み（…）流行におもねらず、書評といえども読ませる、ということだが、その精神をひときわ純粋な形で引き継いでこられた荒川さんの書評集は、まさに本賞の掉尾を飾るに相応しい」「荒川さんはいつも、文学史を参照しながら詩を書き、書評しておられるのだろう。そのように背筋のぴんと張った本書を選べたことを、慶びたい」。

（三面下に本書広告）



濱田武士・小山良太・早尻正宏『福島に農林漁業をとり戻す』が、日本協同組合学会賞学術賞（共同研究）を受賞しました。授賞理由として、「原発事故後の福島県における生業再建と地域再生の取り組みの実態を丹念なフィールド調査から明らかにしそこにおける政策課題や協同組合の役割を実践と理論の両面から描き出した意欲的な業績」。（三五〇〇円）

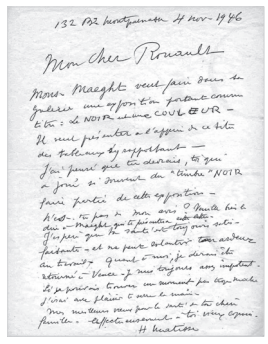


服部文祥『ツンドラ・サバイバル』が、第5回「梅棹忠夫　山と探検文学賞」を受賞しました。講評に、「行為の全体性を貫くメッセージの明確性、探検の先駆性において抜きんでて」。（二四〇〇円）

「親愛なるマティス、真の友情と君の芸術に対する熱烈な共感をこめて―」――ルオー

「リヨンで小瓶を二本見つけたので君に送り届けよう。大事に使ってくれたまえ！」――マティス

20世紀を代表する画家マティスとルオー。鮮やかな色彩とのびやかな線で生きる喜びを表現するマティス。骨太な輪郭線と量感のある色づかいで生きることの困難を描きとるルオー。二人は画学生としてギュスターヴ・モローの絵画教室で知り合って以来、その対照的な気質と画風とは裏腹に、約50年にわたり強い友情で結ばれ、マティスの死の直前まで家族ぐるみの交流をつづけた。

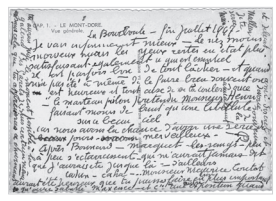


画学生から巨匠へと 50年の往復書簡

《マティスとルオー　友情の手紙》

ジャクリーヌ・マンク編　後藤新治 他訳

パナソニック 汐留ミュージアム監修



Photographie Yvonne Chevalier, 1953. Archives Foundation Georges Rouault.

戦後のどさくさで行方の定かでなかった二人と二人の家族間で交わされた多数の手紙が、二〇〇六年に再発見され、以来、編者マンク氏をはじめとする関係者により解読が進められてきた。

手紙の往と復の関係があらわれ、呼応し、文脈が生まれ、背景が浮き彫りになることで明らかになる二人の歴史――恩師との思い出、画壇への反発、フォーヴィズムの誕生、画商とのトラブル、病いと老い…ひとりの画学生が巨匠へと成長してゆくさまを活き活きと伝える貴重な手紙がいま明らかになる。書簡や関連図版を多数カラーで収録。

［芸術］【一月中旬刊】（A5判・328頁・三五〇〇円）

パナソニック汐留ミュージアム（東京）で**「マティスとルオー　手紙が明かす二人の秘密」**展が、来春1月14日（土）から3月26日（日）まで開催されます。ふたりや家族の手紙を紹介しながら、その時期の絵画作品を展覧。フランスからの初来日作品を含む、合計およそ140点。往復書簡集の編者J・マンク氏を招く記念講演会「マティスとルオーの手紙の発見」も開かれます（1月14日、定員150名、要予約）。

続いて、あべのハルカス美術館（大阪）で**「マティスとルオー　友情50年の物語」**展が4月4日（火）から5月28日（日）まで開催されます。

詳しくは各館へお問い合わせください。

展覧会のお知らせ

東京・大阪

恒例・好評のブックフェアご案内

好評のブックフェアが各書店で開催されています。

「四六判宣言」は、人文系専門書出版社11社による共同企画。文庫では読めない多岐にわたる分野の本を永く伝えてゆくべく、17年続いています。

同じく人文書を中心に刊行する出版社が、自然科学書を前面に押しだした**「ポピュラー・サイエンスの愉しみ」**。書店店頭での新たなる出会いを願いながら、7社で企画しているものです。

「レビュー合戦」は4年ぶりの開催。『パブリッシャーズ・レビュー』を発行する3社がテーマに沿って選出した本を展示、各社担当者が互いに論じた熱いレビューをリーフレットにまとめて店頭で無料配布するこのフェアは、各媒体でも紹介されました。

また、昨年に引きつづき、**「みすず書房 創業70年記念ブックフェア」**を多くの書店でご開催いただきました。話題の新刊からロングセラーまで取り揃えて展示、ご好評をいただいています。

次年もさまざまなフェアを展開してまいります。ぜひ足をお運びいただきたく、詳細はみすず書房営業部までお問い合わせください。

新装版　11月

アメリカン・マインドの終焉
文化と教育の危機

ブルーム　アメリカの〈精神の空洞化〉を扱ったベストセラーかつロングセラー。**菅野盾樹訳 ¥5800**

心の影［全2巻］
意識をめぐる未知の科学を探る

ペンローズ『皇帝の新しい心』に続く〈心〉の理論。新しい物理学の姿。**林一訳　①¥5000 ②¥5200**

量の測度

ルベーグ　数、和、積の定義から量一般、微分積分法にいたる基本を解説する。**柴垣和三雄訳 ¥3800**

原因と偶然の自然哲学

ボルン　確率論的な量子力学が、因果律や決定論と矛盾しないことの哲学的基礎。**鈴木良治訳 ¥4200**

神話と意味

レヴィ＝ストロース　神話と科学、未開と文明など彼自身によるハンディな入門書。**大橋保夫訳 ¥2400**

新装版　1月

クラーク『夢遊病者たち』全2巻（本紙一面ご紹介）の刊行にあわせて、古典的名著を新装復刊します

第一次世界大戦の起原

ジェームズ・ジョル　池田 清訳

開戦の複雑な経緯は、歴史家を魅了してやまない。著者は〈7月危機〉に焦点を絞り、そこにダイナミックに集中していく歴史の力学のベクトルをひとつひとつ検証。世界大戦勃発の起原を長いタイムスパンで解明した、高名な現代史家の名著復活。**¥4500**

みすず書房 近刊のお知らせ

2-4月の刊行予定から

アメリカ経済政策入門（仮）
　コーエン／デロング　上原裕美子訳
貧困と闘う知（仮）デュフロ　峯／アリーン訳
職人の近代　道具鍛冶 千代鶴是秀の世界
　土田 昇
思想としての土方巽　宇野邦一
ポチョムキンの都市
　ロース　加藤淳訳　鈴木了二・中谷礼仁監修
ソ連と東アジアの国際政治　麻田雅文編
精神医療、脱施設化の起源　高林陽展
歴史家の展望鏡　山内昌之
小市民、さてどうする？　ファラダ　赤坂桃子訳
エコノミックス　グッドウィン　脇山美伸訳
スターリンとモンゴル　寺山恭輔
〈眠り病〉とドイツ熱帯学　磯部浩幸
中枢神経系　古代篇　スーリィ　萬年・新谷訳

（ウェブサイトにもご案内しています http://www.msz.co.jp/book/new/）

みすず書房・最近の重版より

過去をもつ人 荒川洋治	¥2700
独り居の日記［新装版］ メイ・サートン　武田尚子訳	¥3400
70歳の日記 メイ・サートン　幾島幸子訳	¥3400
望郷と海《始まりの本》 石原吉郎　岡 真理解説	¥3000
意味としての心――「私」の精神分析用語辞典 北山 修	¥3400
西欧精神医学背景史［新装版］ 中井久夫	¥2800
死すべき定め――死にゆく人に何ができるか アトゥール・ガワンデ　原井宏明訳	¥2800
野生の思考 C. レヴィ＝ストロース　大橋保夫訳	¥4800
時間かせぎの資本主義 ウォルフガング・シュトレーク　鈴木 直訳	¥4200
生命、エネルギー、進化 ニック・レーン　斉藤隆央訳	¥3600

みすず書房 営業部だより

みすず書房の創業七〇年であった二〇一六年が終わろうとしています。書店でのフェア、トークイベントなど、「七〇年」をキーワードにした、多くの催しを行ないました。

幸いにして多くの読者の皆様にご参加いただけたことが自信となり、気持ちを新たに「七一年」目に向けてスタートを切ることができます。ご参加いただきました皆様に感謝申し上げます。

今月から始まったNHKのテレビ番組「100分de名著」では、レヴィ＝ストロースの『野生の思考』が取り上げられています。年始にかけて放映が続きます。再放送もされますので、ぜひごらん下さい。

来年早々からは、本紙でもご紹介していますように**『中井久夫集』**や、話題の歴史書**『夢遊病者たち』**、また**『シベリア抑留関係資料集成』**といった重要な歴史資料も刊行します。

新たな年に向けて、引き続き話題の新刊を刊行してまいります。来年も、どうぞよろしくお願いいたします。

みすず美術カレンダー 2017

二〇一七年版は、特集**「マティスと暮らす」**。油絵、切絵、挿絵など、画家マティスの選りすぐりの作品を収め、ハガキ大、七葉にポストカード一枚付、卓上用です。

ご希望の方は、一部六二〇円（税込）と送料手数料、計七〇〇円分の切手をご同封の上、みすず書房営業部「カレンダー」係（〒113-0033 文京区本郷5-32-21）までお早めにお申し込み下さい。複数のご購入は、営業部（電話03-3814-0131）へお問い合わせ下さい。

図書目録 2017 出来

毎年この時期に作成している小社の総合図書目録ができあがりました。ロングセラーはもちろんのこと、本年十一月までに刊行した最新刊、著作集やシリーズ、オンデマンド版、最近の復刊書、電子書籍、在庫僅少本まで、ただいま出庫可能な一〇〇〇点余をジャンル別にご紹介しています。ご活用いただければ幸いです。本紙添付のハガキにて、どうぞご請求下さい。